

久島における狩猟研究が新たな重要性をもって展開することを期待したい。

田中雅一・石井美保・山本達也編、『インド・剥き出しの世界』春風社、2021年、456 p.

菅野美佐子*

本書は、南アジア各地で生起するあらゆる形の暴力と、それに晒される人々の被傷性を、22名のフィールドワーカーが目撃し、共感し、熟思し、その経験を書き綴ったエスノグラフィーである。タイトルにふくまれる「剥き出し」が強烈な存在感を放つように、本書には中絶、誘拐、老衰、差別、暴行、レイプ、殺人、自殺といった南アジア社会の厳しい現実を突きつけるようなキーワードが散りばめられている。だが、それぞれの書き手が織りなす民族誌には、圧倒的な暴力を眼前にした人々の悲傷や恐怖、絶望だけでなく、そこからの回復や希望の営為も描かれることで、読み手はそれぞれの物語に次第に引き込まれていくのである。

剥き出しの世界と「愛」の所在

序章「インド・剥き出しの世界にむけて」(田中雅一)では、唐突にアガンベン¹の思想と園子温の世界観が、本書を貫く問題意識の軸として登場する。この導入に最初は戸惑いを隠せないのだが、本書を読み進めるにつれて、一見ちぐはぐな2つの視角がどことな

く重なりあう瞬間が垣間見えてくる。アガンベンが想定する「ホモ・サケル(聖なる人間)」は、法的保護から投げ出されるがゆえに殺されても誰も殺人の罪に問われず、しかし祭儀上の犠牲として意味のある死を遂げることも許されない[アガンベン2003]。そこにあるのは意味のある世界(ポリス)から追放され、ただ生きているだけの無機質な生(ゾーエー)である。他方、園子温監督の映画『愛のむきだし』では、行き過ぎた愛の形が暴力的に立ちあらわれ、生の形式としてのバイオスと暴力に剥き出しにされたゾーエーの間で、「液化化した生」とでもいうような激しい生きざまが滑稽に描き出される。本書において、この作品が引用されるのは、日本のある家族の一場面を見れば、剥き出しにされた人々の受苦や愛の経験が、南アジア社会のみでなく、この世界のあらゆる景色に遍在していることを読者に納得させるためであろう。ロシアによるウクライナ侵攻の犠牲者たち、アメリカにおける中絶禁止法やブラック・ライブズ・マターにみる差別や暴力、ロヒンギャやクルド人など政治的圧力によって増える難民、そして日本ではコロナ禍で増加する生活困窮者や、超高齢社会のなかでケアから取り残される高齢者たち。田中がアガンベンの言葉を引用して、われわれ誰しもが「潜在的にはホモ・サケル」であると示唆するように(p.9)、人間はみな被傷性を帯びた存在であることを想起させることで、南アジア社会への共感を呼び起こす仕掛けが施されているといえる。

* 青山学院大学

本書の構成

ここで本書の構成と評者の所感を述べておこう。本書は3部仕立てで構成され、序章を除いた15本の論文と6つのコラムが収録されている。第1部「人生とジェンダー」では人生の各ステージで剥き出しにされる生のありようが描き出され、以下の5本の論文と3つのコラムで構成される。第1章「日常世界における被傷性—リプロダクションの管理としての人工妊娠中絶」(松尾瑞穂)、第2章「子どもの生は誰が守るのか—バングラデシュの共同体の狭間で生きる子どもたち」(南出和余)、第3章「〈剥き出しの生〉が媒介する共同性—スリランカの老人居住施設における老いと看取りの現場から考える」(中村沙絵)、第4章「殺人という特権—パキスタンの名誉殺人」(サイード・フォージア、和崎聖日訳)、第5章「女性への暴力、売春、デーヴァダーシー」(田中雅一)、コラム「守られる名誉、消費される名誉」(須永恵美子)、コラム「病死か自死か他殺か」(安念真衣子)、コラム「君の名は」(山崎浩平)。

第2部の「集合的暴力と差別」ではカースト、宗教、業種など特定の社会集団に対して向けられる敵意、差別、排除といった幾多の暴力の場景が、それぞれのフィールドから切り取られる。収録論文およびコラムは以下のとおりである。第6章「『まなざし』を超えて—『不可触民』をめぐる暴力の位相」(舟橋健太)、第7章「流動化する暴力とヒンドゥー・ナショナリズム」(石井美保)、第8章「災害復興と宗教的マイノリティー—二〇〇一年インド西部地震の事例より」(金

谷美和)、第9章「剥き出しの屠りと匿名的な屠畜者たち—現代ブータンにみる屠畜規制と拡大する放生実践」(宮本万里)、第10章「ネパール・チトワンにおける森林伐採事件—例外状態としての森林と先住民チェパン」(橘健一)、コラム「階層間関係の不安定化」(中屋敷千尋)、コラム「カースト・カテゴリーの境界を生きるということ」(岩谷彩子)。

第3部の「国家と紛争」では、主に、暴力によって大切な家族や隣人の命を奪われた人々の悲しみや苦悩からの回復の実践が、以下のような章立てで描かれる。第11章「戦争犯罪者をめぐる今日の歴史問題—バングラデシュの独立戦争と国際戦争犯罪法廷の裁判記録から」(外川昌彦)、第12章「暴力と忘却—ネパール内戦下の生活と死者、強制失踪者」(藤倉達郎)、第13章「かけがえのない死を悼む—内戦後のスリランカ東沿岸部タミル村落の事例から」(菊池真理)、第14章「性暴力に抗して—メイティ女性による『裸の抗議』」(木村真希子)、第15章「暴力を目の前にした難民の苦境を考える—インド在住チベット難民と焼身自殺」(山本達也)、コラム「踊り子たちの『結婚』事情」(飯田玲子)。

どの章(およびコラム)も、フィールドワーカーとして現地社会と長く深く関わり、その土地の人々との強い結びつきがなければ描くことのできない、生々しく、痛々しくも、真に迫るエスノグラフィーとなっている。一方で、それぞれの論文があつかう地域や人、テーマがあまりにも多種多様であるため、一見すると混沌としてまとまりの悪さを感じる。だがある章の事例や議論が別の章のそれ

と、ふとつながる瞬間があり、3部構成の枠を超えて、互いの論考が呼応しあいながら、全体として南アジア社会の剥き出しの世界を表現していることが理解される。たとえば、第3章（中村）では老い衰え死へと向かう老女の身体を前に、「自分もいつかはこうなる」という内なる他者に気づき、悲しみ、傷つくケアワーカーの被傷性は、そのこと自体がホームの入居者に対するケアの動機づけとなる様子が描かれる。これは、第15章（山本）における同胞の焼身自殺を目撃したチベット難民が、燃え盛る炎に焼かれる身体の被傷性を突きつけられ、それを誰か（ここでは著者である山本）に語らずにはいられない衝動へと駆り立てられる恐怖や悲しみの経験と連動している。また、第14章（木村）のマニプル女性たちの治安部隊による度重なるレイプへの「裸の抗議」は、第4章（サイド）や第5章（田中）に示されるパキスタンやインドや日本の女性の清廉潔白な身体の称揚と対比して捉えることができる。さらに身体にふりかかるスティグマの「ずらし」による差別的・侮蔑的な「まなざし」の回避という実践は、第6章（舟橋）のダリトたちの「名乗り」によるスティグマの攪乱や第13章（菊池）における身内の死の理由を内戦中の殉死へと書き換える行為に共通してみられる。このような各主題と事例の散漫さと一致性が、南アジア社会をより広く、より深く理解する効果をもたらしているといえよう。

剥き出しの世界と人類学

以上のように、多様で混交的な主題と事例

に彩られた本書だが、全ての著者に共通する目論みは、南アジア社会の「闇の奥」に潜む社会や文化の亀裂・崩壊とでもいうべき出来事や状況を議論の俎上に載せることである（p. 18）。このような企てには、人類学がこれまで避けて通るか、果敢にも試みて失敗してきた歴史がある。¹⁾ すなわち、人類学は当該社会にみられる「有害な文化実践」（p. 15）を文化相対主義やオリエンタリズム批判に立脚して尊重することで、その実践が包摂する有害性を容認してきたのである。田中は序章において有害である文化を「問題」と同定し、「尊重」はすなわち「無関与」であるという批判的立場から、あえて「問題」に対峙することを表明する。フィールドでは「抑圧的で野蛮な文化にさらされた人々」（ゾーエー）と「彼らを救済する人類学者」（ビオス）という構図ではなく、フィールドワークをとおしてその境界が曖昧になり、人類学者自身がゾーエーを経験する局面が存在し、そこに人類学が文化的・社会的な「問題」に関与する可能性が拓かれるとしている。

評者はこの可能性に期待を寄せながら本書を読み進めた。評者自身、長きに渡ってインドの低階層の女性たちを対象としたフィールドワークを行っており、夫や家族からの暴力により心身ともに傷つき、新自由主義経済のもとでの暴力的な貧困にさらされる人々を目の当たりにしてきた。しかし厄介なの

1) 「失敗」という見解はあくまで評者の期待を基準とした場合の所感であり、そのような試みそのものは学術的に高い評価を受けている研究も散見される。

は、現地社会の暴力的状況をどのように記述すべきかがきわめて難しいことである。彼女たちの困窮状態や暴力の経験を「悲しみ」や「哀れみ」という共感から、あるいはもっと明確に「問題」として記述すればオリエンタリズムの称揚となり、他方、自らに向けられる「抑圧」のベクトルを躲したりずらしながら日々をたくましく生きる当事者のエイジェンシーを記述すれば、暴力を包摂する抑圧の構造を黙認することになるからである。つまり、どの立場からの記述を試みても諸刃の剣とならざるを得ないのである。

本書を読み進めての結論としては、この難題への明確な答えを示すものではなかった。つまり、本書では、南アジア社会の問題群をここまでは明らかにしたが、「問題含みの残酷な社会とみるのか、現地の人々のエイジェンシーに希望を見出し、社会や文化の暴力性にはひとまず目を瞑るのか、その先をどう考えるのかはあなたたち次第ですよ」と、事象に対する責任の所在が書き手から読み手に転嫁されているように感じたのである。人類学はこの命題をはたして乗り越えられるのか、あるいは乗り越えずにこの定位置を保持すべきなのか、評者自身が今一度考えさせられる契機を与えられたようにも思う。

引用文献

アガンベン・ジョルジョ. 2003. 『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』高橋和巳訳、文芸社。

下條尚志. 『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』京都大学学術出版会, 2021年, 570 p.

今村真央*

「脱植民地化のなかで生じた長期の戦争や、国家政策に起因する政治経済的混乱」に巻き込まれた人々はいかにして生き残ったのか (p. 5). 筆者は現ベトナム南部メコンデルタを対象に、この問いを追求し、明確な答えを提示している。それは『『国家の介入しにくい空間』(p. 52)を創り出してゆく』(p. 6)というものだ。より具体的には、「家や屋敷地、寺院、精米所や闇市といった空間」(p. 504)である。このような空間を、筆者は「国家の『余白』」と呼び、そこでは「国家秩序とは異なるローカルな秩序の原理が働」いたと主張している (p. 66)。

本書の強みはまず、南ベトナムでの現地調査から筆者自身が直接入手したデータの質と量にある。下條は、人口約15,000人の村落(ソクチャン省フータン社)に住み込み、長期フィールドワークを実施した。「ベトナム南部の一村落で一年以上の住み込み調査を実現したのは、ベトナム戦争終結以来、おそらく筆者が初めて」(p. 23)であり、本書にはオリジナルなデータが満ちている。ベトナム南部の多民族社会でベトナム語とクメール語を駆使して無数の聞き取りを実現した著者の能力に評者は圧倒された。

下條は、精力的な聞き取りに基づいたオー

* 山形大学人文社会科学部